

地域連携で行う「学生カンファレンス」で地域の薬剤師全体がレベルアップ

病院や大学へとひろがる、
薬剤師育成の連携



大貫 ミチ (おおぬき みち) 氏
管理薬剤師
薬樹株式会社
薬樹薬局 宮前平2号店 (神奈川県川崎市宮前区)

Profile

薬科大学卒業後、病院の薬剤科へ入職。その後、2012年に薬樹株式会社入社、15年より同社薬樹薬局宮前平2号店管理薬剤師を務める。また、20年より川崎市宮前区薬剤師会会長を務め、地域医療連携に注力している。日本薬学会、日本医療薬学会、日本循環器学会に所属。地域薬学ケア専門薬剤師（暫定）、心不全療養指導士、実務実習認定指導薬剤師、日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師。

薬樹薬局 宮前平2号店で管理薬剤師を務める大貫ミチ氏は、かかりつけ薬剤師制度のスタート以前から薬剤師の存在意義は「継続的な薬学的管理にある」と考え、常に患者さんのバックグラウンドを念頭においた服薬管理を行い、現在は100名以上の患者さんのかかりつけ薬剤師を務めています。また、大貫氏は地域の薬剤師会会長を担う立場から、地域全体の薬剤師のレベルアップを目標にし、地域連携に力を注いでいます。特に、薬科大学や病院と連携した「学生カンファレンス」では、現場の薬剤師と実習生と一緒に学べるスタイルを確立し、今、様々な方面から評価されています。

米国を見て、いずれ日本でも薬剤師の調剤業務に価値はなくなると実感

貴薬局と大貫さんの活動の概要を教えてください。

大貫 当薬局は、同じ医療モール内の整形外科と皮膚科の処方箋を中心に応需しています。処方箋枚数は、1日100枚程度、1カ月約2,000~2,500枚です。薬局は住宅街に囲まれた駅前にあるため広域の処方箋が増加傾向で、現在、広域処方箋の応需は全体の30%くらい

です。7年前の開局当初からお薬手帳を参考に患者さんの服用薬全体、バックグラウンドを見ながら服薬管理をしたいと考えてきました。特に整形外科では慢性的痛みで通院されている高齢者が多く、内科の薬も服用されている方も多数いらっしゃいますので、患者さんには広域の処方箋も持って来ていただくようにお話ししています。服薬情報を一元的に管理し、減薬の提案などを行っていったところ、徐々にかかりつけが増

え、現在、私がかかりつけ薬剤師として担当している患者さんは100名を超えています。

また、現在、宮前区薬剤師会会長を務めています。2カ月に1回、医師会・薬剤師会での研修会の開催、休日急患診療所における体制の強化、地域連携で薬学生に行う「学生カンファレンス」、また「みやまへの会」では地域包括センターを中心として介護職・医療職の連携のための勉強会を開催しています。そこでは私自身も参加しながら講師を務めることもあり、「リフィル処方箋」について解説しました。

大貫さんは、地域薬学ケア専門薬剤師の資格を取得され、地域医療に尽力されています。活動のきっかけがありましたらお聞かせください。

大貫 今から7年前、かかりつけ薬剤師の制度が始まる少し前ですが、以前より重要と考えていた「かかりつけ薬剤師による薬学的管理の進め方」について社内発表したところベストプラクティスアワードを受賞し、

アメリカのシアトルで病院や介護施設、薬局、ドラッグストアなどを見学する機会をいただきました。アメリカのドラッグストアの薬剤師は日本と少々異なっており、風邪薬のような日常的な薬はテクニシャンが調剤し投薬まで行い、薬剤師は必要な場合にしか服薬指導を行いません。ただし、処方箋の内容については薬剤師が全てしっかりチェックを行っています。また、とても印象的だったのは、日本にもある大手のチェーンスーパーの薬の巨大配送センターの見学です。調剤作業がすべてオートメーションで行われ、一人の薬剤師が数千というボトルを監視しています。他の薬剤師は、まったく別の場所で処方箋のチェックを行っています。そのような光景を見た時、いずれ日本でも薬剤師の調剤業務の価値は失われていくだろうと実感すると共に「薬剤師の存在意義は継続的な薬学的管理を行うことで患者さんに貢献することだ」とより強く思うようになりました。そのためにも地域で医療連携を実践し幅広い対応力を身に着けていかなければならないと思ったのがきっかけです。

学生のためだけでなく地域の薬剤師も学べる 「学生カンファレンス」

地域連携活動の中で特に力を注いでいるのはどのような活動でしょうか？

大貫 現在、宮前区の薬学実習生、若手薬剤師の研修に力を入れています。地域の指導薬剤師を含め多くの薬剤師、さらに病院や薬科大学とも連携して実習生に向けた「学生カンファレンス」を行っています。6年制の薬学生は4年制卒の薬剤師より多くのことを学んでいるため、指導側が実習生から教わることも少なく

ありません。研修の内容も自分達でゼロから作り上げています。例えば、以前ポリファーマシーの対策についてカンファレンスを行う機会がありました。意見を交わし、処方箋だけ見ていると解決できず薬歴など患者さんの様々な情報が必要という気づきがあり、薬歴を準備して、では次はどうする？となった時に「SOAP」をベースとしたカンファレンスをやってみましょうとなりました。最近「SOAP」について様々な参考書でも解説されていますが、実際には現場の薬剤師の多

くが学生時代にSOAPやカンファレンスを学んでおらず、とくに、カンファレンスの準備は時間のかかる作業であるためほとんど実践されていないのが現状です。どうしようかという時に「私、できます」とある学生さんが実演してくれたのです。カンファレンスの基本的な進め方が分かれば、経験ある薬剤師が複数の問題が重なったケースや難解なケースでも、具体的な解決法を導き出すことができます。その場で添付文書の内容を確認してすぐに解決すべき問題か、または後で時間をかけ深く調べて解決すべき問題かの判断も重要です。このように学生カンファレンスは、薬学実習生も現場の薬剤師も互いに学べる非常に意義のある時間となっています。学生カンファレンスに参加していただいた薬局には継続してアンケートを行っていますが「学生カンファレンスは手間暇が掛かってはいるが、苦にはならず充実感の方が大きく、今後も継続していきたい」という回答が100%になっています。

学生カンファレンスが病院や薬科大学とも連携しているというのはどのようなことですか？

大貫 学生カンファレンスに、私が地域薬学ケア専門薬剤師として連携している総合病院や薬科大学の先生方にもご参加いただいています。それぞれの立場でご意見をいただくことでより質の高いカンファレンスを目指しています。また、学生さんは、薬局で2.5カ月間学んだ後、病院で2.5カ月間実習を行いますので、実習する病院の指導薬剤師の先生へ薬局実習の内容を詳細に報告しています。その学生さんの経験や特性を知っていただくことで、学生さんの可能性をさらに引き出していただくことに繋がると期待しています。病院や薬科大学から「学生実習における地域連携」という取り組みを評価していただき、学会で発表したり、薬学部先生方にもご紹介したりする機会をいただいています。



学生カンファレンスの様子



宮前薬剤師カンファレンスの様子

地域連携の取り組みの延長に、 教壇に立つという夢の道

現場の薬剤師と実習生と一緒に学ぶというスタイルは素晴らしいですし、大貫さんは学生さんの教育にとっても熱心ですね。

大貫 学生カンファレンスの取り組みがきっかけで、昨年から某薬科大学で「処方解析」という講義をお手伝いさせていただくようになりました。実は高校生まで教師になりたいと思っていました。結局、薬科大へ進学し薬剤師になりましたが、教師という職業にはずっと憧れがありましたし、教育への興味を持ち続けていました。夢は思い続け、言い続け、継続して行動をしていると実現するのだと改めて感じています。大学での講義は薬局実習での「学生カンファレンス」とまったく違う雰囲気です。特に3クラスまとめて300人に講義した時はどうしても一方通行になってしまい、正直私の話に皆ついてきているかなと思うこともありまし

たが、クラス別の講義では各クラスの個性や興味に違いがあることが分かり、学生さんの反応を感じながら私自身も充実した時間になっています。

今後の展望をお聞かせください。

大貫 地域の全ての薬剤師が、地域で必要とされる存在になることが最終目標です。そのためにも地域連携は必要で、学生カンファレンスで薬学生だけでなく、地域の薬剤師の意識とカンファレンス自体のレベルが高まってきているのは非常に嬉しいことです。今後は有事の際などに備え、薬剤師会に属さない薬局との連携、さらには医師会、歯科医師会の連携として三師会としての活動をより積極的に行っていきたいです。また、学生・大学・病院などと一緒に学ぶ活動は、今後も継続的に実施していきたいと考えています。